

1. はじめに

障害児教育の世界で仕事をするようになって35年が経過。この間、時代が変わってきた。

2. (問題) 行動の指導

1) 一般法則

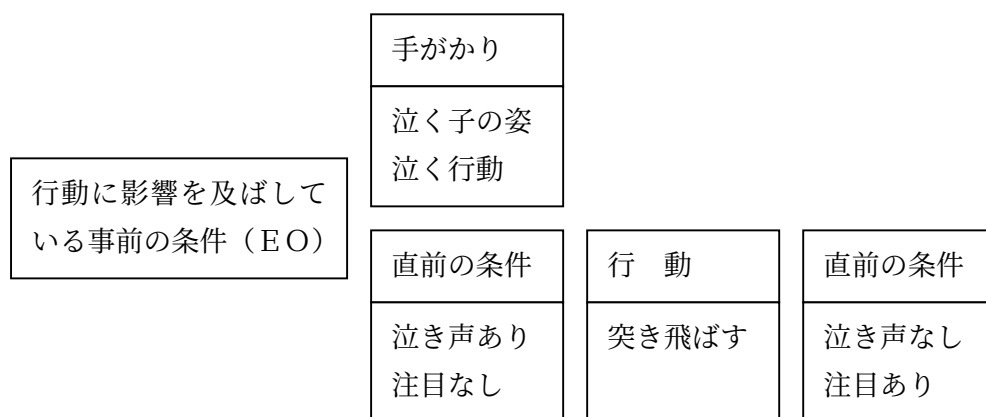
- ① 起きている時間を100とすると、問題となる行動に費やしている時間(A)以外は別の行動(問題とならない行動)に費やしている時間(B)である。A+Bだから、Bを増やせば必然的にAは減る。「良い行動が増えれば、問題行動はなくなる」という原理。
- ② 問題となっている行動をA(過食)とすると「A(過食)をしない」が目標ではなく、Aの反対の行動「A'(適量食べる)」が目標となる。「肯定形表現の原理」
- ③ 目標は具体的に記録できる(数えられる・計れる)行動で書き表す。過食がお茶碗に山盛り3杯食べるのであれば、目標行動A'は「適量食べる」ではなく「小さいお茶碗(当初のお茶碗の90~80%)山盛り3杯食べる」ようにする。3杯は数えられる。
- ④ 指導前に問題行動(変えようとする行動)がどれくらいの場合、量、時間、回数で起こっているか、一定期間観察・測定・記録する。「測定可能な記述の原理」。
- ⑤ 問題行動(変えようとする行動)を最終的に獲得して欲しい行動(目的行動)に近づけていくためには、「スモールステップの原理」を用いる。いっぺんには目標を達成できない。
- ⑥ スモールステップの第1ステップをできるようにするためには「ことば」→「見本」→「身体介助」の順で手伝ってやる。「介助の方法の原理」。手伝ってやったら、思いっきり喜びを表現する。(笑顔、優しい褒めことば、握手、両手パン、頭・ほっぺ撫でなど、シール張るもよし)「強化(褒め)の原理」。この指導中に、少しでも自発的な動きが出てきたら「身体介助」を減らすかなくすかして、そっと手で子どもの後をついていく(シャドウイング=影追い)という。身体介助しなくてもできるようになったら、次に「見本」を減らすかなくすかしていく。「見本」がなくてもできだしたら「ことば」を減らすかなくすかしていく。1回練習するたびに、介助であろうが何であろうが、できたら喜び、褒めてやる。これが大事。いいよ、いいよ、そうだよ。うまいねー。じょうずだよ。良くできたねー。そうそう、それでいいよ。うん。そう。はい、そうです。」(いっぱい褒めことばを覚えて、使えるようにしていく。)(できないとき、失敗したときは、「おしかったねー、もうちょっとだったねー。よく頑張ったねー。」否定することや叱ることはしない。「否定・罰排除の原理」。
- ⑦ 「ことば」「見本」「身体介助」がなくてもできだしたら、ためしに次のステップ2をやらせてみる。ステップ2ができなければ、また「ことば」「見本」「身体介助」で手伝う。それでも無理であれば、ステップ1に戻り、もう少し確実にできるまで練習する。
- ⑧ 目標に至るためには、いくつかの行動の単位をつながなければならない場合がある。はじめは最後まで手伝い褒める。次に、完成に最も近いところから1人でやらせて、褒める。そこができれば、最後の2つの行動を1人でやらせ、できたら褒める。その次は3つの行動を1人でやらせ、できたら褒める。これを「逆向き指導の原理」(逆行型プログラムの原理)という。
- ⑨ 1人で完全にできたら◎、1人でほぼできたら○、介助でできたら△(言、見、身)を(可能ならば、指導ごとに記録する)。記録のないところに成功なし。「記録の原則」

毎日、または何日かに1回、記録をまとめてグラフにする。指導効果が一目でわかる。「グラフ化の原理」（数量化の原理）という。

- ⑩ 指導で身体介助がはずせなかったり、ステップが進んでいなかったりした場合には、指導プログラムを修正する必要がある。「プログラム修正の原理」。指導に行き詰ったのは、子どもが重度だからではない。指導が悪いからである。どうすれば子どもが学習してくれるか子どもに聞くことを意味している。子どもは「そのやり方では、私は覚えていきませんよ」と教えてくれている。「子どもに聞く原理」という。
- ⑪ 指導がうまくいっていると、指導する側も嬉しくなり、一層一生懸命に指導に取り組むようになる。指導がうまくいかないと指導者も士気が下がる。子どもと指導者がお互いに影響しあっている。これを「相互制御の原理」という。一方だけが悪いことは決してない。

2) 具体的手続き

- ① 取り扱いたい行動を困っている順に書く（リストアップする）。
- ② 複数の指導したい行動のうち、優先順位の一番低い行動を確定する。この行動を「指導すべき行動（ターゲット行動）」とする。
- ③ ターゲット行動の記録を回数、時間、割合が計れる形で書く（定義する）。
- ④ そのターゲット行動がいつ、どこで、どれくらい起こっているか、観察・記録する。
- ⑤ その記録方法は以下のやり方に従う。
- ⑥ A B C 分析（機能分析、因果分析）を実施する。



「泣き声」は突き飛ばした子どもにとっては嫌子（嫌なこと）→「突き飛ばした」ら、母親がその子を引き離した。その結果、泣く子（嫌子）がなくなった。

突き飛ばす前には母親や先生や周りの友達の注目（好子＝いいこと）はなかった。→「突き飛ばした」ら、母親・先生に叱られた（注目＝好子）、友達が騒いだ（注目＝好子）

3) 問題行動への対応

- ① A B C 分析（機能分析、因果分析）を行う。
- ② 事前に環境を調整する。
- ③ E O、好子、嫌子を操作する。
- ④ 代替行動を目標にして形成する（泣いていないときに握手する、泣いたら暴れる等）
- ⑤ まわりの人（家庭であれば祖父母・親・兄弟姉妹）が一貫した対応をする。
- ⑥ 一番簡単な問題行動を解決できたら、第2番目に簡単な問題行動の解決に取り組む。

4) 問題行動は早期のうちに解決しておく